神戸新聞 2023年03月02日 木曜日 面名 発言１ １４ 10ページ

日々小論

救急科の出産ラッシュ

論説委員　田中伸明

新型コロナウイルス禍が続く中、神戸市立医療センター中央市民病院（同市中央区）の救急科で、女性医師の出産が相次いでいる。２人は育児休業を経て復帰し、もう１人が産休に入った。同科は新型コロナの重症患者を数多く受け入れ、医療の逼迫も経験してきた。それだけに、新しい命の誕生にスタッフらは励まされている。

副医長の神谷侑画さん(39)は、感染第１波ただ中の２０２０年４月に第１子の育休から復帰し、第６波の22年２月に第２子の産休に入った。その間、コロナ患者専用病棟での診療も経験。同年３月に男児を出産し、翌年１月から復職している。

「妊娠中や授乳期間はコロナ患者を診ない担当に代えてもらった。いろんな配慮の積み重ねに支えられた」と振り返る。

復職のたびに心を奮い立たされる。チームリーダーなど責任ある立場が用意されていたからだ。「勤務時間は短くても、目いっぱい頑張ろうと思います」

第１波が始まった頃、副医長の栗林真悠さん(35)は身重だった。家族が心配したため、予定より早く産休を取ったが、「みんな頑張っているのに」と思い悩んだ。「引け目を感じる必要はない」との周囲の励ましに救われたという。

職場に復帰し、コロナ患者も受診する可能性がある救急外来を担当した時も、家族は心配顔だった。しかし、栗林さんが仕事に生きがいを感じている様子を見て、夫は「復帰してよかった」と言ってくれたという。

２人は院内保育所に子どもを預け、職場にも連れてくる。救急科部長の有吉孝一さん(56)は「こんなにうれしいことはない」と話す。コロナ禍の状況でも子どもを産み育てられる環境は、診療の質も高めるはずだ。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。